第９課　イエスは人々の必要に応えられた

【暗唱聖句】

「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。」マタイ9:35

【今週のテーマ】

今週は地域社会の必要に応えることが、いかに教会にとって大切なことかをイエスの例から学びます。

【日曜日　働きの中断】

マルコ5:22～43にかけて、二人の女性の奇跡物語について書かれています。この物語で注目すべきは、イエスが先に行おうとしていた一人目の少女のための祈りが中断させられ、もう一人の女性の癒しの働きのために時間を使わなければならなくなってしまったことです。その結果、事態は急変し、一人目の少女はなんと間に合わず亡くなってしまうのです。この物語から学ぶべきは、わたしたちも自分の計画が別の働きのために中断させられてしまうことがあるということです。その結果、より一層大変になってしまうことがあるということです。しかし、そのような中にも神様のご計画があり、さらに素晴らしい神様の栄光の現れにつながっていくことを知るのです。

物語は会堂長であったヤイロの12歳の娘が死にかけており、イエスに救いを求める場面から始まります。

「会堂長の一人でヤイロという名の人が来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、 5:23 しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」マルコ5:22、23

イエスはヤイロの求めに応じて、娘のところに歩き始めます。ところが、その途中で思いもかけないことが起こったのです。もう一人、必死な思いでイエスに救いを求めていた女性がそこにいたのです。彼女は12年間も出血性の病気で苦しみ、そのために財産を使い果たしてしまった女性でした。彼女は最後の望みをイエスにかけて、イエスのもとにやってきたのですが、直接「助けてください」とは言えず、ただ黙って後ろからそっとイエスの衣の房に触ります。すると、イエスの中から力が出て、一瞬のうちにこの女性の病が癒されてしまうのです。イエスは立ち止まり、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われます。そして、一刻を争っているのに、足を完全に止められて、自分に「触れた者を見つけようと、辺りを見回します」。そして、この女性が名乗り出ると、「「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい」と優しく言葉をかけられるのです。ところが、その言葉がまだ言い終わらぬうちに、ヤイロの娘が亡くなったと知らされるのです。

イエスのとられた行動から、わたしたちは何を学ぶことができるでしょうか。

一つ目に、今していることを中断してでもしなければならないことがあるということ。

二つ目に、それは魂の救いに関わること。肉体の癒しを求めてきた女性ですが、キリストは「あなたの信仰があなたを救った」と、信仰によって救われることを伝えたかったのです。そして、このことはヤイロの娘が死んでしまうかもしれないということよりも重要だとイエスは考えておられたのです。私たちも、死を前にした人に対して、肉体が癒されること以上に、魂が救われていくことを優先させなければなりません。

三つ目に、ヤイロの娘は間に合わず亡くなってしまいますが、イエスは彼女を死から復活させることによって、さらに大きな栄光を現されました。一見、中断させられてしまったように見えても、神様はさらに大きな目的のためにそれを許されることがあるのです。

【月曜日　どうすればお役に立てますか】

「イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った」マルコ10:51

イエスはその人の必要を御存じであったと思いますが、あえて「何をしてほしいのか」と良く尋ねられました。これにはいくつかの意味が考えられます。一つはイエスがその人の必要に耳を傾けている、関心を示していることを現すためです。人は話を聞いてあげるだけで救われるときがあります。話を引き出してあげることも大切なことです。二つ目は、その人に信仰を働かせるためです。私たちは神様ならすべてを御存じなのだから、祈らなくても必要を満たしてくれると思いがちです。確かにその通りなのですが、あえて求めていることを言葉にすることで、自分の信仰を働かせることになります。

【火曜日　より深い必要】

「イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか」マルコ2:8

「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」ヨハネ4:18

「主よ、あなたはわたしを究め／わたしを知っておられる。139:2 座るのも立つのも知り／遠くからわたしの計らいを悟っておられる。139:3 歩くのも伏すのも見分け／わたしの道にことごとく通じておられる。139:4 わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに／主よ、あなたはすべてを知っておられる」詩編139：１～４

イエスはわたしたちのことをなんでもご存知です。隠すことができません。いや、隠す必要がないのです。ありのまま、イエスの御前に行けばよいのです。主はわたしたちのことを知っていて下さるから、わたしたちは安心できるのです。

わたしたちはイエス様のように他者のことはわかりません。カウンセリングのクラスでは、相手のことが分かったと思った時点で、そのカウンセリングは失敗である。そうではなく、わかってあげたい、理解してあげたいという思いが、相手との間に信頼関係を生むのであると教えられる。わたしたちは預言者になる必要はなく、ただ相手の立場にたち、理解してあげたいと望むとき、そこには愛があります。また、そのような心を主はくんでくださって、正しいあり方へと導いてくださることでしょう。

【水曜日　ヤッファのドルカス】

「ヤッファにタビタ――訳して言えばドルカス、すなわち「かもしか」――と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた」使徒9:36

初代教会の土台が築かれていく中で、様々な素晴らしいクリスチャンたちが登場します。そのひとりがこのドルカスです。ドルカスは病気で死んでしまいますが、ペテロが祈ると生き返ります。このような驚くべきことが聖書に記録されているのですが、しかしドルカスは死者からよみがえったということよりも、貧者のために尽くした人物してよく知られているのは興味深いところです。わたしたちは大きな奇跡を行ったことよりも、小さな愛の施しのほうがずっと心に残る、他者に影響を与えることなのでしょう。

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。13:35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」ヨハネ13:34，35

地域への奉仕はとても大切なことですが、その前に私たちは互いに愛し合うということを考えなければなりません。それがイエスが与えられた新しい掟であり、互いに愛し合うことによって他の人々がイエスの弟子であるということを知るようになるからです。どんなに施しを受けたとしても、互いに仲たがいしている教会であれば、その奉仕が人々をイエスに結び付けることが難しいでしょう。しかし、愛に満ちた共同体は、他者から見ると魅力的だし、世との違いが際立ちます。また、そもそも互いに愛し合わなければ、一緒に奉仕などできません。

愛は神様からきます。だから、天との絆をまず第一持つこと、第二に教会の絆を大切にすること、そして第三に地域との絆を築きに行くことです。

【木曜日　活動している教会】

「あなたの業を主にゆだねれば、計らうことは固く立つ」箴言16:3

教会の活動は、ビジョンを共有し、互いに協力しあうことが大切ですが、伝道戦略は少なくとも三つの情報に基づきます。一つ目は聖書と預言の霊の原則、二つ目は地域社会の必要、三つ目は教会員同市の意見交換です。そして、最後のそのビジョンを主に委ねれば、その計画はうまく進んでいきます。

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。14:27 自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」ルカ1426，27

キリストの弟子として宣教の働きをするというのは、真剣さが求められます。何かのついでにできるようなものではありません。そのことをイエスは教えておられます。

「あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか」ルカ14:28

塔を建てるにしても、十分な資金があるかなどまずは腰をすえて計算することでしょう。同様に、キリストの働きをするときも、腰をすえて真剣に祈り、考える必要があるということですが、しかし、その方法は自分で計算するのではなく、逆に自分を捨て、キリストにゆだねるという方法こそ最善です。

「あなたの業を主にゆだねれば、計らうことは固く立つ」箴言16:3